平成30年度厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
（分担）研究報告書

過敏性腸症候群における中枢神経感作の役割

研究分担者　福土　審　東北大学大学院医学系研究科行動医学教授

研究要旨：過敏性腸症候群においては、中枢神経の感作が重要な病態と考えられる。しかし、このような病態における中枢感作の役割や機序についての研究は未だ不十分である。この問題を解明するには、種々の分野にまたがる慢性疼痛の共通点と相違点を明らかにする必要がある。本年度は過敏性腸症候群における身体併存症の数と身体化の程度が健常者よりも高いという仮説を検証した。対象は過敏性腸症候群49例、不安症29例、うつ病32例、身体症状症37例、非特異的心身症38例であり、健常者32例を対照とした。過敏性腸症候群併存疾患質問票日本語版、消化器外身体症状頻度質問票日本語版日本語版を実施して分析した。結果は、対照群との比較において、過敏性腸症候群では、慢性腰痛症が有意に多かった。消化器外身体症状の中で、対照群との比較において過敏性腸症候群で有意に多い症状は腰痛、排尿困難、冷感過敏または温熱感過敏，性欲低下または異性に対する興味の減退，及び不眠であった。以上から、過敏性腸症候群における中枢神経感作の傍証が得られた。

A．研究目的

過敏性腸症候群(irritable bowel syndrome: IBS)の病態の一部は、中枢神経の感作が重要な病態と考えられる。しかし、このような病態における中枢感作の役割や機序についての研究は未だ不十分である。この問題を解明するには、種々の分野にまたがる慢性疼痛の共通点と相違点を明らかにする必要がある。本年度はIBSにおける身体併存症の数と身体化の程度が健常者よりも高いという仮説を検証した。

B．研究方法

対象は東北大学病院心療内科受診患者185例で健常者32例を対照とした。受診患者内訳はIBS 49例、不安症29例、うつ病32例、身体症状症37例、非特異的心身症38例である。IBS併存疾患質問票(Comorbid Conditions Questionnaire)日本語版、消化器外身体症状頻度質問票日本語版(Recent Physical Symptoms Questionnaire (RPSQ)日本語版を実施して分析した。

（倫理面への配慮）

倫理審査承認を受けて実施した。

C．研究結果

対照群との比較において、IBS群では、慢性腰痛症が有意に多かった。消化器外身体症状の中で、対照群との比較においてIBS群で有意に多い症状は腰痛、排尿困難、冷感過敏または温熱感過敏，性欲低下または異性に対する興味の減退，及び不眠であった。

D．考察

以上から、IBSにおける中枢神経感作の傍証が得られた。本年度はIBSに対して中枢神経感作の評価ツールとして妥当性が検証され、日本語版の有用性も検証済みのCentral Sensitization Inventory (CSI, Tanaka et al, PLOS One, 2017)を用いた調査が倫理承認された。同法を用いた研究を併せて進める予定である。

E．結論

IBSにおける中枢神経感作の傍証が得られた。IBSにおける中枢神経感作の更なる研究が有望である。

F．健康危険情報

特にない。

G．研究発表

1．　論文発表

Kano M, Dupont P, Aziz Q, Fukudo S. Understanding Neurogastroenterology From Neuroimaging Perspective: A Comprehensive Review of Functional and Structural Brain Imaging in Functional Gastrointestinal Disorders. J Neurogastroenterol Motil 24 (4): 512-527, 2018

2．　学会発表

なし。

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許取得　　なし。
2．実用新案登録　　なし。
3.その他　　なし。